

競馬がますます
楽しくなる

続 ファンにやさしい

馬学講座

第49回

鼻出血を発症すると、 なぜ馬は走れなくなるのか

講師

伊藤 幹

もろしき
幹さん

JRA
馬事部 獣医課 課長



案内人：辻谷 秋人
text by Akihiro Tsujiya

表面的には鼻からの出血だが
出血の元は肺にある

例えば脚の骨折であったり腱の損傷であれば、レースに出走できなくなるのは分かる。だが、こんな怪我や病気で出られないのかと思えるものもあって、その代表的なものが鼻出血だろう。

競走馬が鼻出血を発症すると、1カ月間レースへの出走が制限される。2回目の発症ではその期間が2カ月になり、3回目では3カ月になる。人間の感覚では「たかが鼻血」と思われるのだが、なぜそれほど厳しい制限が課されるのだろうか。「確かに表面的には鼻からの出血ではあるのですが、その出血の元は肺なんです。肺からの血液が気道を通って鼻孔まで達して表に出てきたもので、正確には肺出血なんです」

と話してくれるのは、JRA馬事部獣医課の伊藤幹課長だ。

我々の考える「鼻血」は、鼻を指でほじったりして鼻の粘膜を傷つけてしまうことで出血するものだが、競走馬で問題になる鼻出血はそれとは根本的に異なる

ものなのだ。

伊藤さんによると鼻出血(肺出血)の原因はよく分かっているのだが、激しい運動によって血圧が上がり、肺の血管が破れることで発症すると考えられる。激しい運動が前提なので「競走馬や馬術などの競技馬に特有の疾病」(伊藤さん)だといえる。

気になるのは競走能力への影響だが、「ちょっとした出血であれば、さほどの影響はないと思います。しかし、表面的に鼻から出血していなくても、内視鏡で見ると喉の気管が血の海になっているケースもあります。こうなると気道の一部が血で塞がって呼吸が困難になることもありますし、何より肺のダメージが小さいので、競走に影響が出てきます」とのことだ。実際に、思ったほど走れなかったと厩舎が心配した馬を内視鏡検査すると、出血が見られることもあるそう。

鼻出血の予防は難しく、
防止薬の効果も不明

JRAの登録馬では、およそ年間20

0頭前後が鼻出血と診断されている。年によって多少の増減はあるが、この数字はほとんど変わっていない。このうち競走中の発症は年間70頭前後で、こちらも大きな変化はない。

「治療法は、主に対症療法ということになります。そして休養です。壊れてしまった肺の組織が回復するまで、肺に負担がかかる激しい運動は避けるということですね」

鼻出血発症馬の出走制限規定は、まさにこのためだ。十分に回復していないのに激しい運動をしてしまうと、再び発症する可能性が大きくなる。

予防もまた、難しい。鼻出血の予防だけを考えれば、調教やレースのような激しい運動をしなければいいのだが、それは競走馬には無理なことだ。

昔から鼻出血防止に効果があるとされるものに、ラシックス(フロセミド)という薬物がある。よく話題になる薬物なので、聞いたことがある人も少なくないだろう。が、

「アメリカでは打つのが当たり前になっている薬ですが、そもそも鼻出血の原因がよく分かっているわけではないので、ラシックス

が効いているのかは不明です」ということである。

このラシックスは本来は利尿剤で、禁止薬物の隠蔽剤(禁止薬物を尿によって体外に排出させる)として使われることがある。ラシックスの投与はドーピングと密接に絡んだ問題で、そのため日本やヨーロッパではラシックス自体が禁止薬物として使用が制限されている。この禁止薬物の問題はひじょうに重要で、かつ興味深いものなので、いずれあらためて取り上げてみたい。

JRA施設内における鼻出血発症頭数の推移
(2005~2014年)

